

知の玉手箱 2010

Best 34 Book Reviews by The Students & Others
at Mii Campus in Kurume University

久留米大学
御井図書館 編

読んで知る「喜び」ここにあり。

<http://www.mii.kurume-u.ac.jp/miilib/>

『知の玉手箱 2010』 発刊にあたって
デジタル情報溢れる時代だからこそ
本を手にとり、ページをめくる楽しさを …

Prologue

「知の玉手箱」が新たな装いとなりました。インターネット経由で多様な情報がタイムリーに手に入る時代、紙媒体の冊子は古いのでは？ 図書館のホームページに本の紹介ページを作れば充分なのでは？ と一時は存続が危ぶまれた本書。しかし、「ネット上での本の紹介と印刷物とはまた違うもの。印刷物発行は続けるべき」という図書館長・遠山先生からの熱いご意見があり、委員一同もそれに賛成する形で継続されることになりました。趣旨は従来どおり、学生に向けた本の紹介をとおして、本というメディアに一層親しみを感じていただきたいというものです。ちなみに、今年度版は初の試みとして、希望する学生を募って選書ツアーを行い、選んだ本の中からお勧めの本を紹介してもらいました。

これを機会に「デジタルの情報と印刷物は何が違うのか？」少し考えてみました。

インターネット情報の利点は、新しい情報が短時間で不特定多数の人に届き、印刷費用がかからないという点でしょう。そして、その内容は、良く構成されたものから個人の独り言まで…様々です。間違いや誤解されやすい表現を校正する機能は少なく、内容や文体がカジュアルになりがちな印象を受けます。しかし、訂正は簡単で、もし重大な問題があれば、瞬時にすべて消し去ることも容易です。このような情報の海の中から、読者には自分の必要とする情報を選び出す能力が求められます。

一方、印刷物は、活字になる前の編集作業や複数回の校正を経て、世に出ることになります。文字数制限があるのが常で、内容は自ずと洗練され、間違いも少なくなります。ただし、一旦著者の手を離れると修正が難しいぶん、著者には多少の覚悟が必要になります。

今後はインターネット上のデジタル情報と印刷物、それぞれの特性を理解して、目的に応じて上手に使い分ける必要があります。現実にはこの先、インターネット上の情報量はますます増えていくことでしょう。最近では、伝統ある雑誌や新聞の休廃刊といった話も耳にします。そのような中、生まれ変わった「知の玉手箱 2010」の、デジタル情報にはない良さが、皆さんに伝わればと思います。

久留米大学
健康・スポーツ科学センター
教授 吉田 典子

はじめに

- p.1 『知の玉手箱 2010』発刊にあたって
吉田 典子(健康・スポーツ科学センター)

ライトサイエンス

- p.4 『話を聞かない男、地図が読めない女』
／アラン・ビーズ、バーバラ・ビーズ 著／藤井 留美 訳
塚崎 公義(商学部)
『一年は、なぜ年々速くなるのか』／竹内 薫 著
右田 孝志(健康・スポーツ科学センター)

文芸

- p.5 『野分』／夏目 漱石 著
岩下 祥子(大学院生)
『白仏』／辻 仁成 著
安藤 裕介(文学部)
- p.6 『終末のフール』／伊坂 幸太郎 著
前田 勇治(法学部学生)
『風が強く吹いている』／三浦 しをん 著
林 静香(文学部学生)
- p.7 『おとなり 萌芽のころ』／まなべ ゆきこ 著
内村 瑠美(文学部学生)
『ひとり日和』／青山 七恵 著
長田 有紀(文学部学生)

時代小説

- p.8 『蝉しぐれ』／藤沢 周平 著
中牟田 誠(文学部学生)
『蘭陵王』／田中 芳樹 著
後藤 紫公(文学部学生)

ミステリー・SF

- p.9 『重力ピエロ』／伊坂 幸太郎 著
香田 彩(文学部学生)
『青空の卵』／坂本 司 著
無津呂 洸介(法学部学生)
- p.10 『われはロボット』／アイザック・アシモフ 著／小尾 美佐 訳
行徳 由紀(法学部学生)

随筆・エッセイ

- p.10 『人生を輝かせる10のお話』／日野原 重明 著
坂本 宏成(法学部学生)
- p.11 『居なおりのすすめ』／森 毅 著
右田 孝志(健康・スポーツ科学センター)

社会・政治・時事・ノンフィクション

- p.11 『代案を出せ!』／勝谷 誠彦 著
辻本 尚弥(健康・スポーツ科学センター)
- p.12 『仕事とセックスのあいだ』／玄田 有史・斎藤 珠里 著
満園 良一(健康・スポーツ科学センター)

p.12 『同日同刻 太平洋戦争開戦の一日と終戦の十五日』

／山田 風太郎 著

遠山 潤(文学部)

p.13 『美しき日本人は死なず』／勝谷 誠彦 著

辻本 尚弥(健康・スポーツ科学センター)

『夜回り先生』／水谷 修 著

山木 勝正(法学部学生)

p.14 『だから、あなたも生き抜いて』／大平 光代 著

井上 祐紀博(法学部学生)

実用・自己啓発

p.14 『地味ですが何か?』／おぎやはぎ 著

眞島 由香利(文学部学生)

p.15 『本質を見抜く「考え方」』／中西 輝政 著

諸藤 泰佑(商学部学生)

『「頭がいい」とは、文脈力である。』／斎藤 孝 著

諸藤 泰佑(商学部学生)

p.16 『本がいままでの10倍速く読める法』／栗田 昌裕 著

諸藤 泰佑(商学部学生)

『安河内哲也の「英語学習スタートブック」』／安河内 哲也 著

池田 拓馬(法学部学生)

スポーツ

p.17 『察知力』／中村 俊輔 著

原 賢二(経済学部)

p.17 『イチロー頭脳』／児玉 光雄 著

正野 太葉(法学部学生)

p.18 『「北島康介」プロジェクト』／長田 渚左 著

原 賢二(経済学部)

詩歌・児童書

p.18 『新編 ほくは12歳』／岡 真史 著

岩下 祥子(大学院生)

p.19 『ほくのいす?』／すぎもと れいこ 著

大崎 芳恵(文学部学生)

『妖怪アパートの幽雅な日常』／香月 日輪 著

石井 希奈(文学部学生)

p.20 『ラン パン パンーインドみんなわ』

／マギー・ダフ 著／ホセ・アルエゴ、アリアヌ・ドウィ 画

／山口 文生 訳

遠山 潤(文学部)

医学・薬学

p.20 『説明力UP!臨床で役立つ薬の知識』／折井 孝男 監修

永田 郁夫(久留米大学病院薬剤部)

コラム

p.21 大学生なら知っておこう!「データベース」本のこと

図書館にはネットじゃ手に入らない情報も多数所蔵!

男性と女性の違いを 科学的かつ楽しく検証

塚崎 公義（商学部）

男女差別はいけません。では、男女の区別はどうでしょうか。男性と女性は、外見を見ても体力を見ても、明らかに違います。それを無視して同じように扱うことが本当に平等であり望ましいことなのでしょうか。あるいは違いを強調することは男女差別を深刻化させるだけなのでしょうか。

こうした問題はタブーとされ、正面から論じられることは多くありません。しかし、学生の間には一度は真剣に考えてみて欲しい題材だと思います。

その際に、ぜひ参考にして欲しいのが本書です。本書は、外見や体力のみならず、脳の構造にも男女差があると説明しています。数百万年前から外で狩をしてきた男性と家の中で育児をしてきた女性では、伸びてきた能力がおのずと異なるのであって、どちらが優れているということではなく、ただ違うのだ、というわけです。

科学的な研究をもとにしながらも、文章は読みやすく、読んでいて飽きない本だと思います。ぜひ一度読んでみてください。

『話を聞かない男、地図が読めない女』

アラン・ビーズ+バーバラ・ビーズ 著／藤井 留美 訳
主婦の友社 刊／¥700（税込）

“時間の感覚”の秘密を 楽しく科学的に解明！

右田 孝志（健康・スポーツ科学センター）

前期の授業が終わったと思ったら、あっという間に後期が始まる。そうしていると、あっという間に一年が過ぎる。小さい頃は一日が長く感じたし、一年という単位がイメージできないくらいに長く感じたように思う。この感覚は一般的なものだろう。そして、時間そのものは絶対的なものだから、一年が「あっ」という間にすぎるのは、主観的なことだということも事実だろう。しかし、本当に時間は絶対的なものか？そもそも、「時間を測る」ことは可能か？時間の感覚について、著者の専門とする物理学的な視点から、さらに生物学的な視点からアプローチが試みられている。そして、タイトルを説明するための様々な仮説が提唱され、検証されている。このように書くと、とても堅苦しい印象を与えるかもしれないが、決してそんなことはない。著者は研究者（としての能力はあるのだろうが）ではなく、サイエンスライターと自称するように、この本のコンセプトである「科学をエンターテインメントする」に基づいた一般科学書である。

『一年は、なぜ年々速くなるのか』

竹内 薫 著／青春出版社 刊
¥788（税込）

私の背中を押した明治40年の青年の想い 漱石の「現代」に時効はない

岩下 祥子（大学院生）

「近々『現代の青年に告ぐ』といふ文章を書くか又はその主意を小説にしたい」（高浜虚子宛書簡）「死ぬか生きるか、命のやりとりをする様な維新の志士の如き烈しい精神で文學をやつてみたい」（鈴木三重吉宛書簡）一。そう告げて、漱石は小説『野分』を書いた。

金力主義の世俗に弾かれて田舎教師を辞め、雑誌記事の執筆で生計を立てる白井道也。中学時代大人に唆され、教師であった道也にストライキを行った過去を持つ貧しい文学青年、高柳周作。高柳の親友で富裕層に生まれ育った中野。三者三様の明治40年の生き方が描かれる。漱石の「現代」に時効はない。

「どうしたら學問で金がとれるだらうと云ふ質問程馬鹿氣た事はない。學問は學者になるものである。金になるものではない。學問をして金をとる工夫を考へるのは北極へ行つて虎狩をする様なものである」との道也の演説が、学部3年時、進学決断の背中を押した。高柳と等身大の学生にこそ、漱石の声が届く。

『野分』（二百十日・野分）

夏目 漱石 著／新潮社 刊

¥460（税込）

大川・大野島を舞台とした明治人の生き方 フランスでも高評価を得た命の物語

安藤 裕介（文学部）

この作品の舞台は大川市の大野島である。久留米大学から見れば地元とも言える場所なので、多くの学生にとって馴染みのある地名。方言が出てくるのでそれだけでも楽しいと思う。作者の辻仁成の祖父が大野島出身ということで、作者は自分の祖父を主人公にしてこの作品を描いている。小説なので多少、辻流のアレンジはあるが、基本的には事実に即した読み物である。

「白仏」は、この島に生きた明治生まれの鉄砲屋の壮絶な生涯、とりわけ骨仏づくりに捧げた晩年を描いた物語である。最大のテーマは過去と未来、一体となる命とはどういうことかになるだろうか。

この作品はフランス語に翻訳され、それがフェミナ賞外国小説賞を受賞している。極めて日本的な作品のように一見思われるが、実はフランス人の世界観、価値観とも相通するものがあるというこの証明だろうか。読み易い作品なので、まずは一読を勧める。

『白 仏』

辻 仁成 著／文藝春秋社 刊

¥480（税込）

全人類が避けては通れない
「死」を超えて生き抜く意味とは？

前田 勇治（法学部学生）

8年後に小惑星の衝突による滅亡を宣告された地域。その宣告から5年経ったころの日本の仙台にある団地「ヒルズタウン」。この団地の住人たちが滅亡まで残り3年という現実を前にして、それぞれの生き方を見つめ直していく…。

8つの短編で構成されており、それぞれ、団地の住人が主人公となっています。地球上すべての人間に共通に設定された絶対に避けられない死に対して、どのように考え、どのように生きていくのかということが描かれています。厳しい現実を目の当たりにしても非観的にならず、各々しっかりと強く生きていこうとする登場人物たちの姿が、とても印象に残る作品です。

『終末のフール』

伊坂 幸太郎 著／集英社 刊

¥660（税込）

読後、何かに打ち込んでみようと
思わせてくれる一冊

林 静香（文学部学生）

2009年に映画化された『風が強く吹いている』の原作です。

ボロアパート「竹青荘」に集まった大学生10人が、箱根駅伝を目指して走る姿を描いた小説で、登場する人物はどれも個性的。一人ひとりのキャラクターが、丁寧に描かれているので楽しく読むことができます。そして、メンバーのほとんどが陸上未経験者でありながら、たった10人で箱根駅伝出場という無謀に思える挑戦をします。

リーダーのハイジを中心に、バラバラだった10人が一つになり始め、目標に向かって一緒に走る姿は青春そのものです。また、台詞にも心うたれる部分がたくさんあり、ユーモアと感動を一緒に味わえるような内容になっていると思います。

今まで駅伝に興味のなかった私が、この本を読んで箱根駅伝の見方が変わり、選手たちを心から応援したくなりました。読み終わったら走りだしたくなる、何かに打ち込んでみようと思わせてくれるそんな一冊です。

『風が強く吹いている』

三浦 しをん 著／新潮社 刊

¥860（税込）

自分を見つめる機会を与えてくれた 映画『おとなり』のプレストーリー

内村 瑠美（文学部学生）

この小説は映画『おとなり』のプレストーリーとして、四季を通して描かれています。私は映画を見てから、この小説を読みました。

小説では、主人公たちそれぞれが悩みや葛藤といった壁にぶつかり、自分の進むべき道を探していく過程が描かれています。自分と照らし合わせながら、自分を見つめる機会を与えてもらった気がしました。そして、文章自体は作者が女性ということもあり、柔らかく優しい印象を受けました。

一方、映画では同じアパートに住む、お隣り同士の主人公たちが、互いに一度も顔を合わせたこともないのに、壁越しに聞こえてくる「音」を通し、徐々に惹かれ合っていくという恋愛が中心となっています。小説中でも壁越しに聞こえてくる「音」は、悩み、葛藤する主人公たちを癒す存在として描かれています。

小説と映画、両作品のキーワードは「音」。「音」でつながっていくストーリーを活字と映像で2度楽しむことのできる作品だと思います。

『おとなり 萌芽のころ』

まなべ ゆきこ 著／角川書店 刊

¥1,575（税込）

何気ない日々の中に存在する 出会いと別れ…そして成長の物語

長田 有紀（文学部学生）

“人っていやね。人は去っていくからね”

本書は、主人公の女の子・千寿が遠縁のおばあさん・吟子と暮らした一年間の出来事を描いています。出来事とはいっても、特に盛り上がるような事件はなく、綴られるのはありがちで普通の日常です。そんな平凡な毎日の中で千寿は恋をし、同時に吟子さんも恋をします。20歳の恋と70歳の恋。形はだいぶ違うけれど、二人は互いに影響し合いながら、それぞれの恋愛に励み、緩やかな日々を過ごします。しかし、物語の終わる冬、二人の恋は異なる結末を迎えることとなります。

決して劇的ではない、どこにでもありそうな出会いと別れ。子供から大人に成長する過程は、そういった何気ない日々の中に存在する。本書は、そんな当たり前のことを思い出させてくれます。少し淋しくて、でもなぜだか温かい気持ちになれる。石原慎太郎や村上龍などの選考委員も絶賛した、第136回芥川賞受賞作品です。

『ひとり日和』

青山 七恵 著／河出書房新社 刊

¥1,260（税込）

時代小説の枠を超えた 青春の著

中牟田 誠（文学部学生）

『たそがれ清兵衛』、『隠し剣鬼ノ爪』、『盲目剣笏返し(武士の一分)』で著名な藤沢周平の小説であるこの作品は、藤沢文学のファンならばお馴染みといえる海坂藩を舞台とした作品の一つである。

元服を迎える直前の、大人と子どもの狭間に位置する牧文四郎と隣家に住む娘、ふくとのやり取りから物語は始まる。

中学3年の教科書にも採択されたこの作品は、思春期を迎え、様々な動乱や感情、そして青春の迷いに揺れ動く文四郎やふく、そして文四郎との熱い友情を抱える親友たちとのやり取りを踏まえ、それを乗り越えて生きてゆく文四郎の成長を垣間見ることができる。その時、読者はこの作品を一介の時代小説ではなく、小説のスタイルという垣根を凌駕する名作と感ずることができるだろう。

教科書では出だしのみの採択となっているが、この機に読破し、思い返すたびに風情の一つひとつが想起される情景に、思いを馳せてみては如何だろうか。

『蝉しぐれ』

藤沢 周平 著／文藝春秋社 刊

¥700（税込）

三国志の時代から 300 年後に生きた 中国の名将の物語

後藤 紫公（文学部学生）

中国と言えば、『三国志』『封神演義』『西遊記』を挙げる人が多いだろうが、三国志から 300 年後の『蘭陵王』も広く知られるようになったら人気を得ると思う。日本では、『蘭陵王』と聞けば、舞曲を思い浮かべる人がいるかもしれない。彼は実在した人物であり、若くして亡くなった武勇に長けた武将である。彼は、美しい顔を鬼面で隠し、戦場に出れば必ず勝利を得た名武将として北齊の兵達に慕われていた。しかし、それに嫉妬した皇帝に毒殺されてしまう。舞曲『蘭陵王入陣楽』は、彼を慕った部下達が蘭陵王がまだ生きていた時に作ったもので、今もなお後世に伝わっている。

中国の歴史はとても長い。『三国志』に比べたら、『蘭陵王』の知名度は低いかもしれないが、正史『北齊書』の史家も、彼の若すぎる死を悼んでいる事を表す一文を載せているほどの人である。ぜひこれを機会に、この本を手にとってもらい、少しでも多くの人に彼の事を知ってもらいたい。

『蘭陵王』

田中 芳樹 著／文藝春秋社 刊

¥1,575（税込）

切なくて哀しい
 家族の絆が織りなすミステリー
 香田 彩（文学部学生）

兄の名前は泉水、弟は春。暗い過去を抱えた二人が大人になったとき、事件は起きた。不可解な連続放火とグラフィティアート、そして英単語。春から放火についての話を聞いた泉水は、事件の真相解明に乗り出した。

ある時、郷田順子という美人の女性が「春の精神が不安定だ」と泉水に告げる。その言葉に思い当たる節がある泉水は不安になるが、彼女は詳しく話そうとしない。兄・泉水が知らないことを郷田順子は知っている。一体彼女は何者なのか。放火事件と関連はあるのだろうか？ 一方で、泉水は探偵に葛城という男の調査を依頼した。この男は泉水と春、入院中の父、亡くなった母に関係があるようだ。この家族にとって葛城はどんな存在なのか。そして葛城と放火の関連性は？ 事件を追っていくうちに泉水がたどり着いた真実とは？！

切なくて哀しい、家族の絆が織りなすミステリー小説。最後までドキドキさせられる小説です。ぜひ読んでみてください。

『重力ピエロ』

伊坂 幸太郎 著／新潮社 刊
 ￥1,575（税込）

引きこもり気味の青年が謎を解きながら
 成長していく、読後感さわやかな物語
 無津呂 洸介（法学部学生）

この本は、引きこもり気味の鳥井真一と、そんな彼を外の世界に連れ出そうと奮闘する坂本司という2人の男を主人公とした探偵物語。全3冊のシリーズ（本書は第一巻）ですが、そのほとんどが短編なので、続編から読んでもよいと思います。

このシリーズのおもしろさは、坂本の視点から徐々に、複雑な生い立ちのおかげで心を閉ざしがちだった鳥井が人と出会い、独特な観察眼で様々な謎を解いていきながら成長していく姿にあります。物語の途中、坂本が鳥井のために外出を促し、一緒に買い物に行く場面など、鳥井は本当に引き込みなの？と思う部分もありますが、いたるところに「遠出は嫌だ」「家から離れている」といったセリフが散りばめられており、やはり鳥井は引きこもり気味のようなのです。が、本のタイトル自体、そんな彼の成長を表すように、1冊目は卵、2冊目は巣、3冊目は鳥となっており、引きこもりの青年が少しずつ成長し、旅立っていく姿にさわやかな感動を覚えます。

『青空の卵』

坂本 司 著／東京創元社 刊
 ￥780（税込）

ロボット小説の第一人者による初期短編集 今の時代だからこそおもしろい

行徳 由紀（法学部学生）

この本はロボットものSF作品の第一人者、アイザック・アシモフの初期の短編作品がまとめられたもので、この本において有名な「人に危害を及ぼしてはならない。命令に服従しなければならない。また第2項に反しないかぎり自己を守らなければならない」というロボット工学三原則が示されています。この短編集はロボ心理学者であるスーザン・キャルビン博士が過去に出会ったロボットたちを振りかえるという形で書かれており、小説に登場するロボットたちは、人の心を読むなど様々な性格を持ちながらも、みな三原則に従うようになっています。それにも関わらず、一見、三原則に反する不可解な行動をするロボットたちの行動の謎を、また三原則に沿って解き明かしていきます。ロボット技術の発展の目覚ましい今、読んでみるのもおもしろいかもしれません。

『われはロボット』

アイザック・アシモフ 著／小尾 美佐 訳／早川書房 刊

¥760（税込）

人生を最後まで充実させるための アートと文学にまつわるエッセイ集

坂本 宏成（法学部学生）

本書は、著者の日野原重明さんのアートと文学に対する随筆である。全十章から構成されており、非常に読み易い印象だ。著者である日野原重明さんは聖路加国際病院理事長・名誉院長の役職を務める96歳の現役医師である。その年齢もさることながら、日本の医療と発展に尽力し、功績を上げ続けている大変な権威のある方のようなのだ。そのような著者が、歳を重ねていかにいきいきと生きるか、長い人生を最後まで充実するにはどのように過ごしたらよいかというテーマに対し、少年時代から現代に至るまで馴れ親しんでいるアートと文学で応えている。医師という観点から、また御自身も長寿であるという観点から、人生を輝かせるものとして、アートと文学を確信しているという著者の語りには確かな説得力がある。本書の巻末には、著者が本文で紹介したアートと文学の資料の一部が記載されており、視覚でも楽しめるものとなっている。

『人生を輝かせる10のお話』

日野原 重明 著／実業之日本社 刊

¥1,200（税込）

学者・教育者の在り方や人生の本質を 柔らかく語り下ろした一冊

右田 孝志（健康・スポーツ科学センター）

著者は数学者であり、多くの著書がある。著書といっても専門書でなく、一般向けが多いようだ。

私にとっての著者は、数学者というよりも、随分前に出演していたテレビ CM の印象が強い。何となくボーッとした雰囲気醸し出しながら、下手な演技をしていた。それでいて、かなりインパクト与えるものだった。それは周りを気にしない、自分の存在をあるがままに表現していた感じがした。そんな存在感を見越して、CM 起用されたのかもしれない。

この本も、そのような著者の姿勢が言葉として表現されたもののように思える。いろいろな機会に著者が書いてきたものを編集したエッセイなので、語り口調の少しくだけた雰囲気になるが、学者として、教育者としての著者の在り方を感じられる一冊だと思う。

『居なおりのすすめ』

森 毅 著／筑摩書房 刊

¥632（税込）

自分の生活、国、そして社会のことを 考えるきっかけにどうぞ！

辻本 尚弥（健康・スポーツ科学センター）

政権交代前に出版された、タイミングの良い本である。交渉の場ではあたり前のことを書名にし、社会の多くの問題について質疑形式で書かれた本である。現代社会の問題を取り上げているだけに質問は難しいが、回答は話し言葉を駆使して、平易で(時には少し品がないけれど)かつ明快である。問題を単純化しすぎるきらいもあるが、問題解決の仕組み自体を大きく転換するためには、これくらいの単純化が必要だと思う。この本を読むと、戦後約 60 年もの間、政治家と官僚とマスメディアは、だれのために存在していたのだろうかと少し虚しくなる。新政権に多くを期待はしないけれど、情報を積極的に開示して、政治の場で今、何がなされているのかが見えるようにだけはしてもらいたい。さらにネットや新しいメディアが興隆し、チェック機能のための多くの視点が得られればよいと思う。自分の生活とひいては国や社会を考えるきっかけとなる本です。手に取ってみてください。

『代案を出せ！』

勝谷 誠彦 著／扶桑社 刊

¥1,260（税込）

セックスレスの背景から 見えてくる様々のものとは？

満園 良一（健康・スポーツ科学センター）

帯にある通り、仕事とセックスについて真面目に考えた本である。雑誌『AERA（アエラ）』のアンケート記事から踏み込み、セックスレスを掘り下げた内容で、セックスレスの背景から様々なものが見えてくる。著者は同誌におけるアンケートの結果が怪しいのでは、と感じたことを否定しない。であれば、丁寧にデータを分析した上で議論すべきと見た。その辺は信じるしかないが、一気に読めた。ここでのセックスは生物学的性ではなく、「セクシャリティ」として扱っているが、社会論や経済論としても読めるし、他国との比較も微に入り、面白かった。セックスレスと少子化を単純に関連付けるだけでは何も解決しないことは間違いない。

個人的には、骨盤底リハビリなるものに感心し、医療の質を考える上で大変参考になったと同時に、身体論としても読めた。巻末の特別対談では、「遊び」が「仕事とセックスのあいだ」にあるものとして語られていたが、これは今、私たちにもっとも足りない「教養」かも知れない。

『仕事とセックスのあいだ』

玄田 有史・斎藤 珠里 著／朝日新聞社出版局 刊

¥735（税込）

第二次世界大戦下の歴史的な“あの日”、 世界の人々は何を考え、行動したのか？

遠山 潤（文学部）

英首相チャーチルは、かつて日本がパールハーバーを攻撃したということを知った時、「かくして、我々はずいにこのとき戦争に勝ってしまったのである。ヒトラーの運命は定まった。ムソリーニの運命も定まった。日本に至っては、木っ端微塵に打ち碎かれるであろう」と書いた。また、日本が降伏を受諾したニュースを絵画商の店で聞いて、「グッド！」と、一言いったのみで、絵画評を続けた。

本書は、このように、歴史的な「一日」（昭和16年12月8日）と「十五日」（昭和20年8月1日から15日）の間に記された第二次世界大戦下の敵味方の文書を時系列で配列し、世界中の「同日同刻」に政治家や軍人、兵士、作家や大衆が何を考え、どう行動したのかを彷彿させるような読物として、作家・山田風太郎がまとめあげたものだ。8月15日正午の玉音放送に至るまでの御前会議や軍部の動向はとくに詳細で、途中で止められないくらいの迫力がある。

『同日同刻 太平洋戦争開戦の一日と終戦の十五日』

山田 風太郎 著／筑摩書房 刊

¥882（税込）

ただ生きるのではなく よく生きるための指針となる一冊

辻本 尚弥（健康・スポーツ科学センター）

この本には「希望」がある。読み進む中でこのことを強く感じた。暗いニュースばかりで未来に希望を抱けない現代、声高に主張する事なく、また愚痴することもなく、自分ができることをぶれることなく淡々こなし、ながら働いている人たちが、この本で語られている。本書は『女性自身』連載の「シリーズ人間」の何編かをまとめたもので、取材を『女性自身』の記者が、文章をアンカーマンである勝谷誠彦氏が手がけている。『女性自身』を読んだことがない私は、出版されて初めてこの物語を知った。しかし、この一文を読むためだけに『女性自身』を購入するほどの価値があると感じた。「義」や「志」や「利他」という言葉の使われる事が少なくなった今、著者の言を借りれば「ただ生きるのではなく、よく生きる」ためにも十分に読む価値がある。ぜひ一度、手に取ってみて下さい。読後には深い反省と清々しい気分、そして「よく生きる」希望が湧いてきます。

『美しき日本人は死なず』

勝谷 誠彦 著／アスコム 刊

¥1,470（税込）

この本は、自分のそれまでの “人の見方”をすっかり変えてくれた

山木 勝正（法学部学生）

皆さんは、夜回り先生と呼ばれている水谷修さんという人をご存知でしょうか。彼は夜間高校の先生で授業が終わると、深夜の繁華街や公園へ夜回りに行っている。それは、街角にたむろする若者たちを暴力団や薬物の誘惑から守り、早く家に帰すためである。そんな中、これまで水谷先生は数々の危険な場面に遭遇してきた。中でも僕が一番驚いたのは、ある少年を暴力団から抜けさせるために、落とし前として自分の利き手の指を一本切ったことです。どうしてここまでできるのかが分からないというのが僕の正直な思いです。でも若者のことを考え、ここまでしてくれる先生が世の中にいるのでしょうか…。

僕は、水谷先生のことをとても尊敬しています。この本に出会ったことで、どんな時でも心に辛い気持ちを抱えて生きている人がいるんだと感じ、人を見る目が変わりました。他にもこれまでに関わってきた若者との喜びと悲しみが綴られています。ぜひ、皆さんに読んでもらいたい一冊です。

『夜回り先生』

水谷 修 著／サンクチュアリ出版 刊

¥1,470（税込）

自らの「いじめ克服」経験を通して 人として大切なことが伝わります

井上 祐紀博（法学部学生）

この本は、著者の大平光代さんが中学時代のいじめから、自殺未遂、裏切りなどの末、16歳で極道の妻になります。そんな人生のどん底から一念発起して司法試験に合格。最終的に弁護士になるという話です。私は法律を学んでいる身なので、少しでも法律に関する本を皆さんに推薦しようと思いました。

本編では、いじめに遭っていた時代の苦しい日々が文章を通してリアルに伝わってきます。そして、自分をいじめた人たちに復讐を誓います。その復讐とは「自分が立ち直ること」。結果、彼女は宅建受験を皮切りに、次々と資格試験に合格して弁護士となり、現在は、非行少年の更生に務める弁護士として活躍しています。

この本は、いじめに対する考え、いじめられる側の気持ち、周囲の人の大切さが分かる一冊。文字もやや大きく、文章も難しくないので短時間で読める本です。ぜひ読んでみてください。

『だから、あなたも生き抜いて』

大平 光代 著／講談社 刊

¥1,470（税込）

地味だっていいじゃない！ 社会で生きる姿勢を教えられました

眞島 由香利（文学部学生）

この本は、私自身が将来や就活のことで落ち込み気味だった時に本屋で見つけて、思わず手に取ってしまった本。今の時代、個性が重視され、地味な人ってなかなか評価されないような気がしていましたが、この本を読んで、無理に自分を作ろうとしなくていいんだと、物事をちょっとだけポジティブに考えられるようになりました。

内容としては、サラリーマンを経てお笑い芸人となったおぎやはぎが、地味な人へ向けたビジネス本。でも、お堅い文章なんかは皆無。むしろ、彼ら独特のゆるいトーク形式で進んでいくので、本を読んでいるというよりは、なんだか友だちと世間話をしているような感覚です。

私は、ハウツー的な本はあまり好きではないのですが、この本は「まっ、人それぞれだよ」というスタンス。押しつけがましくなくて、かつ柔軟な姿勢が、社会で生きていく上で必要なんだろうなって感じました。悩みを抱えている人、お疲れ気味な人に読んでもらいたい一冊です。

『地味ですが何か？』

おぎやはぎ 著／あさ出版 刊

¥1,365（税込）

自分の頭で考えることの 大切さを教えてくれる一冊

諸藤 泰佑（商学部学生）

正しいものの見方や考え方をするのに大切なのは「自分の頭で考える」ということ。そして、できるだけいろいろな立場や視点からものごとに光を当て、曇った眼鏡や色眼鏡、歪んだレンズでものごとを見ないようにしなければならない。それらはすべて「考える対象と親身に交わる」ことから始まる。

人はすべての情報を一度自分というフィルターに通してものごとを判断しなければならない。それは正否を判断するのは自分だからだ。他人ではなく、多数決でもない。今の時代、特にこの判断する力が求められている。不景気や就職氷河期と言われ多くの人が危機を感じている今こそ、メディアや企業、国、その他さまざまな周りからの情報に流されず、しっかりと自分を持って本質を見抜かなければならないのだ。

ただし、自分を持てば正しい判断ができるわけではない。自分の考え方、自分のフィルターの性能を上げるために、この本はさまざまな場面で役に立つ考え方を分かりやすく紹介してくれている。

『本質を見抜く「考え方」』

中西 輝政 著／サンマーク出版 刊

¥950（税込）

言葉の真の意味をつかまえることで 得られる充実感を求めて…

諸藤 泰佑（商学部学生）

皆んなより勉強ができて社会に出たら「使えない」人、そういう人は場の周辺の脈絡（流れ、状況、雰囲気）が読めない人。頭がいい人は少し話ただけで話が通じていろんなことを分かってくれる、事柄の本質を捉えて、場の文脈、相手の文脈で考えることができる人。つまり、人や場が持っている文脈を捉え、現実を把握する力（文脈力）こそが真の頭のよさだ。

頭がいい人はどんな気持ちで生活していると思いますか？意味をつかまえることには充実感がある。そして、私たち人間は常に意味を食べて生きている。私はこの本を読んで意味（文脈）を捉える力を身につけ、もっと充実感を味わいたいと強く思った。そのためには、文脈力を鍛える方法は分岐点に戻ること。さらに、なぜその話をしているのか、どこからその話になったのか、何の話をしかけていたのかを答えられるようになることがポイントだとか。「何歳からでも頭はよくなる」との一文に前向きな気持ちをもらえる一冊。

『「頭がいい」とは、文脈力である』

斎藤 孝 著／角川書店 刊

¥500（税込）

速読技術を習得することで 見えてくる風景とは？

諸藤 泰佑（商学部学生）

本一冊が10分で読めて、しっかり理解できるようになる。読書に抵抗がなくなり、文章力も上がる。記憶力、集中力、洞察力が格段に向上する。感覚が鋭敏になり、物事にスピーディーに対応できる。発想力や企画力、想像力が強化される。物事にあらゆる角度からアプローチする柔軟性が身につく。

本をいままでの10倍速く読めるようになった時、どれだけ人生が変わるだろうか。おそらく自分に自信を持つことも容易にできるようになるはずだ。

この速読法の中心となるのは、目と心と体（脳）の使い方。目を鍛えて多くの情報を心に取り込み、心で情報をイメージ化して記憶に焼き付け、脳が情報を整理して書き出す。体は良い姿勢をつくり、心の良い状態を保ち続ける。実際に体験してみれば分かるが、あっという間に読書スピードが2倍、3倍になる。さらに、目を鍛えることは脳を活性化し、目つきや顔つきも変える。顔が変わっていくのが分かる。

『本がいままでの10倍速く読める法』

栗田 昌裕 著／三笠書房 刊

¥560（税込）

英語学習をしたい人の モチベーション維持にどうぞ

池田 拓馬（法学部学生）

皆さん、安河内哲也さんを知っているでしょうか？大学受験英語で彼の著書にお世話になった人もいます。彼は累計320万部以上も書籍を売り上げ、カリスマ英語講師として名高い人物です。本書では「なぜ英語を勉強するのか？」、例えば世界共通語で便利だからといった手垢にまみれた理由だけでなく、日本人で英語ができると人気者になれる。そのために映画、iPod、インターネット、マンガの英訳など楽しく学習できるツールを紹介するといった、誰にでも興味を抱かせる彼らしい親切で熱心な構成と内容になっています。啓発の面でもネイティブらしさを目指さない、1日30秒でいいから長期的に続けてみる。学習にラク（楽）なことはないが、楽しく努力する方法はあると述べています。もちろん、実践的な「読む、書く、話す、聞く」の講座も入っているので、すでに英語を学習中の人も基礎確認、モチベーション維持に最適な一冊だと思います。

『安河内哲也の「英語学習スタートブック」』

安河内 哲也 著／Jリサーチ出版 刊

¥1,470（税込）

万事に通じる中村俊輔の たゆまぬ努力と思考

原 賢二（経済学部）

本書の著者、中村俊輔といえば日本サッカー界を背負って立つ「日本の 10 番」である。天才プレーヤーのように映るかもしれないが、本当は努力の天才といえるのかもしれない。それほどサッカーに対して真摯な姿勢で臨んでいるのである。中村俊輔選手は、毎日の反復練習と情報収集、こまめな目標設定と自己反省をサッカーノートに書き付けることで、常に己を客観視し、「察知力」を磨いてきた。スペイン紙のインタビューでも、取材した記者が「君は本当にロコ・デ・フットボル（サッカーバカ）だな」と驚いたという。

本書には、現在の中村俊輔をつくるきっかけとなったユース時代の出来事をはじめ、「察知力」の磨き方や、自身の心身鍛錬術について綴られており、その考え方はサッカーだけでなく万事に通じるものがある。サッカーで成功を収めている著者の思考に触れてみたい人はぜひ！

『察知力』

中村 俊輔 著／幻冬舎 刊

¥777（税込）

イチローのスゴさの裏から学ぶ “夢の叶え方”

正野 太葉（法学部学生）

イチロー選手は今年、9年連続 200 本安打という前人未到大記録を達成した。彼はこれまでも数々の大記録を達成してきた偉大な選手だ。様々な分野において偉大な人の言葉には非常に奥深い意味がある。イチロー選手は目標に対する考え方について「自分は自分の能力を知っているから、いくらでも先はある。自分の数字を目指すというのは、常に限界の挑戦である」と答えている。この言葉からは、他人に打ち勝つのが目標ではなく、自分のベストを超えるのが目標であるということが読み取れる。このような意識があれば目標を達成しても、また次の目標に挑戦することができる。他にも準備の大切さについて質問されて「華麗なプレーをするために準備は絶えずやっている」と答えている。私たちもこのことから学べることは多くある。例えば大切な試験で良い成績を取ろうと思ったら、毎日の復習や生活のリズムを整えることが大事だということである。ぜひ読んでみてください。

『イチロー頭脳』

児玉 光雄 著／東邦出版 刊

¥1,365（税込）

100分の1秒に魅せられた 男たちの8年間の軌跡

原 賢二（経済学部）

「ちょ～気持ちいい！」からはじまり、「何も言えねえ～」と北島康介選手が日本国民を感動の渦に巻き込んだのは記憶に新しい。アテネオリンピック、北京オリンピックと2大会連続2種目で金メダルを獲った北島康介選手だが、実は17歳で臨んだシドニーオリンピックでは表彰台を逃して4位入賞に終わっている。

この本はシドニーオリンピック後に結成された「チーム北島」と呼ばれた専門集団の話である。チーム北島にはアテネオリンピックでメダルを獲得するために北島選手をサポートする5人の専門家がいた。この5人の専門家と北島選手が歩んだ金メダルまでの道のりから垣間見える、選手・コーチ・各専門家のプロフェッショナリズムは注目に値する。

100分の1秒に魅せられた男たちの話をぜひ読んでほしい。

『「北島康介」プロジェクト』

長田 渚左 著／文藝春秋社 刊

¥1,470（税込）

夭折した天才少年詩人の“魂の叫び”に 私たちの心は…

岩下 祥子（大学院生）

人は信じるものではない。大人のいうことは黙って頷く。自分はどいう存在であることを求められ、どうしたら誰も傷つかないのだろう。葛藤に大人は「一度は通る道」と微笑んで、肩を抱く。葛藤はいつ？大学入学時？高校受験の前？すべてが空しくて、権力者の虚栄心ばかりを埋めることに費やされている未完成な身体と、どこにも届かない自分の小さな声を恨めしく思った日々の「痛さ」は振り返ってもあの時のまま、熱く苦しい。もし、その熱さ、痛さ、苦しさが、わずか12歳の自我に襲ってきたら。

本書は永遠に12歳となった少年の、鋭い感受が詰まった心の詩集である。読後は悲愴でない。大人と認識されない私たちは、心の中、真史君と教室でお喋りをする。校庭でサッカーをする。「死」ではなく「詩」に真史君を見るのが自然であるから。

「人間ってみんな百面相だ」と呟く作者に、「そんなことないよ」なんて言わない。

『新編 ぼくは12歳』

岡 真史 著／筑摩書房 刊

¥567（税込）

小さなお子さんと一緒に 楽しめる絵本です

大崎 芳恵（文学部学生）

筑後市中央公民館図書室の「お話会」で読んだ絵本の一冊です。この時は、2～3歳の親子連れから小学校低学年までの子どもたちが集まり、約30分間、手遊びや紙芝居を交えながらの会となりました。その際、私は子どもたちに集中してもらえよう、文章が短いこの絵本を選びました。また、本自体のサイズも決して大きくないのですが、15人ほどの人数でしたし、はっきりした絵で楽しんでもらえました。

お母さんが「ぞうさんだよ」とお子さんに声をかけたり、ほかの子も「ボールだ!」「カメやろ」などと、絵を見て何の絵だと反応を返してくれました。最後のオチに「えー、ちがーう」とのリアクションもあり、苦笑してしまいました。文章をそのまま読むだけでなく、聞き手が返してくれることで、絵本をきっかけに会話ができ、読み手だった私にとっても楽しい経験となりました。一度読んでみてください。特に、身近に小さなお子さんがいらっしやればぜひ一緒に。きっと楽しめます。

『ぼくのいす?』

すぎもと れいこ 著／教育画劇 刊

¥893（税込）

世界の広さを教わりながら成長する 少年の「ほのぼのストーリー」

石井 希奈（文学部学生）

主人公は両親に先立たれて親戚の家で暮らしていました。高校入学を期に、家を出て寮に入ろうとします。しかし寮が全焼し、妖怪アパートと呼ばれるアパートに入居することになります。実は、そのアパートはこの世のものとこの世のものでないモノが共存する本物の妖怪アパートなのです。さらに入居している人間たちも、超個性的な人たちばかりで、主人公はそんなアパートの住人たちに囲まれて暮らすうちに人間として成長していきます。この本は、主人公の成長物語なのです。主人公の両親に先立たれて苦労したことですっかり狭まっていた世界は、妖怪アパートの住人たちによって様々な非日常を目の当たりにしていくうちに、徐々に壊されていき、世界は広大なもので、もっと広い目で自分の未来、可能性を見つめろと教えてくれます。この物語の主人公を通して、住人たちは読者にもそのことを教えてくれるのです。

『妖怪アパートの幽雅な日常』

香月 日輪 著／講談社 刊

¥470（税込）

絵の良さはもちろん、スケールの 大きなインディシ的想像力に脱帽

遠山 潤 (文学部)

この絵本の魅力は、王様にさらわれたようぼうを奪い返すために、王様とその家来たちにたった一羽でたたかいをいどむクロドリの眼にある。また、とがったとげの刀をさし、クルミのからでかぶとを作り、「たたかいのたいこ」をランパンパンと叩きながら行進するいでたちにある。その絵がいいのだ。

そして、ネコやアリのむれ、木のえだ、川がクロドリの耳の穴に入りこんでいっしょに王様をやっつけるところも、すごいといえはすごい。川が“わたしもいこう。王様はわたしの水をよごしたんだ”と言う。川とどうやって話すのだろう。小さな鳥の耳の穴に、どうやって川がまるごと入るのだろう。でも「川はなんとかすき間を見つけ」て、耳の中に入ってしまふ。このような物理を無視した同様の趣向に、日本の『おふろだいすき』やウクライナ民話『てぶくろ』がある。だが、無生物をじぶんの味方に付け、時空を超えて羽ばたくインディシ的想像力の気宇にはおよばない。

『ラン パン パンーインドみんなわ』

マギー・ダフ 著／ホセ・アルエゴ+アリアンヌ・ドウィ 画

山口 文生 訳

評論社 刊／¥1,260 (税込)

薬に関するあらゆる情報入手に 役立つ虎の巻

永田 郁夫 (久留米大学病院薬剤部)

「生命の質」が問われ、健康に対する関心が高まる中で溢れる医薬品の情報。そのような中、薬の飲み方、使い方など、さまざまな場面で戸惑うことはありませんか？

例えば、お薬とは何か？ といった素朴な疑問をはじめ、多くの人々が望む「薬についての的確な情報」を調べるのに役立つのが本書です。

医療従事者だけでなく、一般の人にも分かりやすいように、たくさんのイラストを取り入れるなどの工夫を凝らしている他、漢方薬に消毒薬、輸液、注射などに関する解説など、幅広い内容にて構成。薬に関する情報入手、さまざまな疑問の解決など、きっと役に立つはずです！

『説明力 UP！臨床で役立つ薬の知識』

折井 孝男 監修／学習研究社 刊

¥2,100 (税込)

大学生なら
知っておこう！

図書館にはネットじゃ手に入らない情報も多数所蔵！

【データベース】本のこと

今やインターネットを駆使すれば、様々な情報がラクに入手できる時代。しかしながらネット情報は、信憑性や情報の深さという点において、まだまだ充分と言える状況にはありません。そこで、ここでは御井図書館に常置している2つの「データベース」本を紹介します。レポートや論文執筆の際に、ぜひ活用してみてください。

著名人の正確な情報を知りたいなら…

『新訂増補 人物レファレンス事典 昭和（戦後）・平成編』
日外アソシエーツ編集部刊 ¥100,800（税込）

Googleで「野村克也」と入力すると、Wikipediaがトップに近いところに表示され、野村元楽天監督についていろいろなことが分かります。Wikipediaはとりあえず見るにはたいへん便利なツールです。でも、そこに書いてあることは論文やレポートに使うには証拠としての信頼性に欠けます。

その点、図書館にある『人物レファレンス事典 昭和（戦後）・平成編』で「野村克也」を引くと、78種の事典類の中の10種に掲載されていることが分かります。そして、他の68種の事典には掲載されていないということも同時に分かります。78種の事典を全部揃えている図書館はそう多くないので、人物を調べる時、正確な情報が掲載された事典類へ確実に導いてくれるこの『人物レファレンス事典』は大変便利です。なお、本書は、この「昭和（戦後）・平成編」以外に、「古代・中世・近世編」「明治・大正・昭和（戦前）編」なども含めた全6冊組みです。また、姉妹編として『外国人物レファレンス事典』もあります。

雑誌・新聞に関する詳細な情報を知りたいなら…

『雑誌新聞総かたろぐ』
メディア・リサーチ・センター刊（年刊）¥24,150（税込）

雑誌のオンライン書店 Fujisan.co.jp のサイトでは3,500以上の雑誌が定期購読できます。そのサイトを調べてみると、売り上げランキング1位は『週刊ダイヤモンド』とあります。

ですが、図書館にある『雑誌新聞総かたろぐ』を見ると、『週刊ダイヤモンド』の発行部数は11万4,570部。そして、『an・an』（女性週刊誌／25万2,970部）の半分より少ないということが分かります。

この『雑誌新聞総かたろぐ』は、国内で発行される定期刊行物2万2,273点（雑誌類1万8,291点、新聞類3,981点）について22項目の情報を提供する年鑑です。Fujisan.co.jpより雑誌の数が圧倒的に多く、また提供される情報内容も正確・詳細で、ネットでは手に入れない貴重な情報源となっています。たとえば、『an・an』の広告掲載料金はカラーの紙面1ページあたり230万円といったようなことまで分かるのです。

※ここで紹介したデータベース本はいずれも御井図書館1F
「レファレンスコーナー」で閲覧可能です。